

還相回向の研究

小池 秀章

はじめに

『教行信証』『証卷』には、真実の行信によつて与えられる「真実の証（さとり）」について説かれている。その本文は大きく二つに分かれ、前半は、「往相の証果」、つまり、浄土に往生して成仏することについて明かし、後半は、「還相の悲用」、つまり、穢土に還つて来て衆生を救済することについて明かしている。この「往相の証果」と「還相の悲用」は、二つの事柄ではなく、「往相の証果」の内容が「還相の悲用」なのであり、浄土に往生して成仏することとは、穢土に還つて来て衆生を救済するはたらきをする身となるということなのである。しかも、後半の「還相の悲用」を表す還相回向釈が、『証卷』の大半を占めているということは、真実のさとりとは、自らのさとりを完成するという自利のみにあるのではなく、他を救済するという利他にこそ、その中心があることを示すものであろう。そして、何よりも忘れてはならないことは、浄土に往生し成仏すること（往相）も、穢土に還つて来て衆生救済すること（還相）も、ともに阿弥陀如来の本願力によるということである。そして、これを回向（回

らし振り向ける」という言葉で顕し、往相回向・還相回向と言うのである。

尚、「証卷」の総論及び前半部分の「往相の証果」については、拙論『教行信証』の研究——「証卷」を中心として——において述べているので、本論文では、後半の「還相の悲用」（還相回向釈）について、考察していく。

1. 還相の悲用（還相回向釈）

（1）還相回向を顯す

『教行信証』『証卷』の還相回向釈は、最初の御自釈以外は、『浄土論』と『論註』の引文で構成されている（最後に往還結釈の御自釈あり）。まず、最初の御自釈に、

二つに還相の回向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補処の願（第二十二願）より出でたり。また一生補処の願と名づく。また還相回向の願と名づくべきなり。『註論』（論註）に顯れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。（『註釈版聖典』三二三頁）

とある。これは、「教卷」の最初に、

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。（『註釈版聖典』一三五頁）とあるものを受けたものであり、「証卷」の前半で往相について述べ終わつたので、ここから還相について述べるのである。

往相とは、「往生浄土の相状（浄土に往生するありさま）」の意味であるのに対し、還相とは「還来穢国の相状」つまり、「浄土に往生した後、（衆生救済の為に）この世（穢国）に還ってくるありさま」という意味である。そして、

それが、阿弥陀如来の本願力によるということを回向（回らし振り向ける）という言葉で表している。

「利他教化地の益」の「利他」とは、自利に対する利益他（他を利益する）の意味であり、「教化地」とは、衆生救済の地位のことである。つまり、浄土に往生し成仏した者は、穢土に還つて来て衆生を救済するというはたらきをするということである。但し、還相を可能ならしめるのは、阿弥陀如来の本願力であることを考えれば、「利他」の根源に、他力の意が含まれていると言つてもよいであらう。^(註)

還相が阿弥陀如来の本願力回向によることを明確に示したものが、次の

すなはちこれ必至補処の願（二十二願）より出でたり。また一生補処の願と名づく。また還相回向の願と名づくべきなり。

という言葉である。「必至補処の願」と「一生補処の願」という願名は、魏訳の『大経』の第二十二願文（究竟必至 一生補処）から取った名（文名）であり、「還相回向の願」という願名は、法義から立てられた名（義名）である。

第二十二願文は、次に直接引用せず、

『註論』（論註）に顕れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。

と、後の『論註』の引文の中での引用となっている。

（2）引文（『浄土論』・『論註』）の文

御自釈の後、釈の引文であるが、『浄土論』（①）・『論註』（②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩）の合計十文が引かれる。

①『浄土論』『利行満足章』（五功德門の園林遊戯地門の釈）の引文

まず、『浄土論』『利行満足章』五功德門の園林遊戯地門の釈を引用し、還相回向の内容を表している。

出第五門とは、大慈悲をもつて一切苦悩の衆生を觀察して、応化の身を示す。生死の園、煩惱の林のなかに回入して、神通に遊戯して教化地に至る。本願力の回向をもつてのゆゑに。これを出第五門と名づく（『註釈版聖典』

三二三頁）

とあるのが、それである。『浄土論』には、往生の行として五念門（礼拝・讃嘆・作願・觀察・回向）が説かれる。そして、その五念門によつて得られる功德として、五功德門（近門・大会衆門・宅門・屋門・園林遊戯地門）が説かれる。五功德門の中、初めの四門は、自利の行（入・浄土に入る）であり、第五番目の園林遊戯地門は、利他の行（出・教化の為に浄土を出る）である。これらの自利利他の行が完成して仏のさとりを成就することができるのである。引文中の「出第五門」とは、回向門によつて得られる園林遊戯地門のことであり、その内容は、還相回向を表すものである。つまり、浄土に往生した者は、大慈悲心をもつて、苦しみ悩む一切の衆生を見て、さまざまな姿を現し、煩惱に満ちた迷いの世界に還つて、思いのままに衆生を教え導く位に至るのである。そして、それは、「本願力の回向をもつてのゆゑに。」とあるように、阿弥陀如来の本願力の回向によるのである。この「本願力」とは、『浄土論』当分では、往生人の本願力であり、還相回向の主体は往生人であるが、親鸞は、その主体を阿弥陀如来であるとしたのである。

②『論註』『起観生信章』の引文

二番目の引文は、『論註』『起観生信章』の文である。「起観生信」とは、觀察によつて、信を生ずるということだ

ある。往相・還相の二種回向を説く中の、還相回向の文であり、還相という語が明らかに出る文として注目されている。それによると、

還相とは、かの土に生じをはりて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、ともに仏道に向かへしむるなり。（『註釈版聖典』三二三頁）

と、還相とは、浄土に生まれ、自利の智慧（静かな心で浄土に生れたいと願ひ〈奢摩他〉〔作願〕、智慧をもつて如来の徳を確認する〈毘婆舍那〉〔觀察〕）と利他の慈悲（方便力）を成就して、迷いの世界に還つて来て、すべての衆生を導き、ともに仏のさとりに向わせることである。そして、

もしは往、もしは還、みな衆生を抜いて生死海を度せんがためなり。このゆゑに、〈回向を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに〉（浄土論）とのたまへり。

と、「往相も還相もみな衆生の苦を除き、生死の迷いから救済する為である。だから、『浄土論』に、〈阿弥陀如来の回向をもととして、大いなる慈悲の心を成就されたのである。〉と述べておられる。」と阿弥陀如来の回向を根本としているということを明らかにされるのである。親鸞は、ここでも回向の主体を阿弥陀如来であるとするのである。それは、『正像末和讃』に、

如来の作願をたづぬれば 苦悩の有情をすてずして

廻向を首としたまひて 大悲心をば成就せり（『註釈版聖典』六〇六頁）
とあることから明らかである。

③『論註』『觀察体相章』の引文

三番目の引文は、『論註』『觀察体相章（觀行体相章）』の文である。「觀察体相」とは、觀察の対象となる淨土、仏及び菩薩の莊嚴相を明かすということである。その「觀察体相章」の仏莊嚴八種功德成就の第八の後半から以後が引用されている。

この引文は、(i) 仏莊嚴八種功德成就の第八「不虛作住持功德成就」の文、(ii) 仏莊嚴八種功德成就の次第を示す文、(iii) 菩薩莊嚴四種功德成就の文、の三つに分けられる。

(i) 仏莊嚴八種功德成就の第八「不虛作住持功德成就」

まず、仏莊嚴八種功德成就の第八「不虛作住持功德成就」の文である。不虛作住持功德とは、仏の虚妄ならざるはたらきによって安住し、成立しているすぐれた性質・はたらきということである。不虛作の願力によって、往生人がすぐれた利益を得るのである。具体的には、

〈すなはちかの仏を見たてまつれば、未証淨心の菩薩、畢竟じて平等法身を得証す。淨心の菩薩と、上地のものろもろの菩薩と、畢竟じて同じく寂滅平等を得るがゆゑに〉（淨土論）とのたまへり。（『註釈版聖典』三二三頁）とあるように、未証淨心の菩薩は、淨土に往生して仏を見たならば、平等法身を得る。それは上位の菩薩（淨心の菩薩と上地の菩薩）がたと同じく、寂滅平等の法を得るからである。

未証淨心の菩薩とは、未だ清淨な心となっていない菩薩のことで、菩薩の位で言えば、初地から七地までの菩薩のことをいう。この位の菩薩は、まだ自他へのとらわれが残っているので、利他の活動をするのに、作心（心〈強い意志力〉を働かせること）を必要とするのである（有功用地）。それに対して、淨心の菩薩（八地の菩薩）や上地の

菩薩（九地・十地）の菩薩は、一切のとらわれを離れ、作心を用いず、自在に利他活動をすることができるのである（無功用地）。平等法身とは、相対的差別の見方を離れ、絶対平等の真理（寂滅平等）をさとした八地以上の菩薩のことである。

そして、この八地以上の菩薩は報生三昧を得るという。報生三昧とは、果報として自然に生じた寂靜の境地をいう。七地の菩薩が八地の菩薩になる時、法性生身を得る。法性生身は、生死肉身に対するもので、迷いの世界に生きている凡夫は、生死の肉身であるが、迷いの世界（生死）を超えた聖者は、法性（真如）から生じた身を得るのである。生死肉身は分断生死（有限的な体の生死）、法性生身は變易生死（限定を超えた体の生死で、法性の道理に従って衆生を導くために、現れたり隠れたり自在に変化する）と言われている。報生三昧は肉身を離れて法性生身を得る時、その法性生身の果報として生れながらにして自然に得られる三昧であるので、報生三昧と言うのである。

そして、報生三昧の具体的内容を、

この菩薩は報生三昧を得。三昧神力をもつて、よく一処・一念・一時に、十方世界に遍じて（不動而至・一念遍至）、種々に一切諸仏および諸仏大会衆海を供養す（無相供養）。よく無量世界に仏・法・僧ましまさぬ処にして、種々に示現し、種々に一切衆生を教化し度脱して、つねに仏事をなす（示法如仏）。〔註釈版聖典』三三四頁（カッコ内、著者挿入）

と、菩薩莊嚴四種功德で示される、不動而至・一念遍至・無相供養・示法如仏の徳として表している。続いて、「往來の想、供養の想、度脱の想なし。」と、報生三昧の衆生救済が、作心を用いない任運無功用の救済であることを明らかにするのである。

尚、先述のように未証淨心の菩薩とは、初地から七地までの菩薩のことであるが、道綽は『安樂集』巻下に、こ

の文を引くにあたり、「十方の人天、かの国に生ずるものは、すなはち淨心の菩薩と無二なり。」（『註釈版聖典七祖篇』二八〇頁）と、十方の人天まで含めて解釈している。親鸞においても、未証淨心の菩薩に、七地以前のすべての行者、凡夫までも含むとされていたと考えてよいであろう。

つまり、親鸞は、一切の衆生が淨土に往生すれば、平等法身の身となり、寂滅平等の境地に入り、報生三昧の徳を得るとするのである。未証淨心の菩薩は、利他の活動をするのに作心があるが、淨心の菩薩は、作心なく利他の活動するのである。これが還相のはたらきであり、不虛作住持の阿弥陀如来の本願力によりめぐる事を、明らかにされるのである。次の第二十二願の引用も、そのことを表すものである。

第二十二願文の原文を漢文で挙げると、

設我得仏	他方仏土	諸菩薩衆	來生我國	究竟必至	一生補処	除其本願
自在所化	為衆生故	被弘誓鎧	積累徳本	度脱一切	遊諸仏国	修菩薩行
供養十方	諸仏如來	開化恒砂	無量衆生	使立無上正真之道	超出常倫	
諸地之行	現前修習	普賢之徳	若不爾者	不取正覺	（『原典版聖典』二三頁）	

であるが、曇鸞や親鸞の読み方は通常とは違う。^{（註）}

曇鸞は、へたとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生せば、究竟してかならず一生補処に至らん。その本願ありて、自在に所化の衆生の為のゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正真の道を立せしめんをば除く。常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん。若ししからずは正覺を取らじ」と読み、「常倫を超えて一生補処に至らしめることを誓った願」であるとする。つまり、「常倫諸地の行を超出し」とあるように、

未証淨心の菩薩（凡夫含む）が淨土に往生したなら、常倫の十地を超えて、いきなり一生補処の位に至る根拠として第二十二願を引用しているのである。

それに対して親鸞は、へたとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生して究竟してかならず一生補処に至らん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱せしめ、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずは正覺を取らじ」（『註釈版聖典』三一六頁）と読み、「還相回向を誓つた願」であるとする。未証淨心の菩薩（凡夫含む）が淨土に往生したなら、仏の悟りを開き、衆生救済の為に再び菩薩となる。これを從果降因の還相の菩薩という。その還相の菩薩のはたらきを、「常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。」と言うのである。つまり、從果降因の還相の菩薩は、從因至果の菩薩のような階位を超えて、機縁に応じて自在に姿を変えて、教化がなされるのである。その根源として、第二十二願が引用されているのである。

（ii）仏八種莊嚴の次第を示す。

次に、仏八種莊嚴功徳を説き終わった後の結びとして、その次第を示した文が引用されている。

前の十七句は、これ莊嚴国土の功徳成就なり。すでに国土の相を知んぬ、国土の主を知るべし。このゆゑに次に仏莊嚴功徳を觀ず。（『註釈版聖典』三一七頁）

と、先の十七種の国土莊嚴功徳が説かれているが、それによつて、国土の莊嚴功徳が完成しているのであり、次に、その国土の主について知らねばならないので、次に仏莊嚴功徳を觀ずといい、具体的には、まず、座を觀じ、身業

を觀じ、口業を觀じ、心業を觀じ、大衆を觀じ、上首を觀じ、主を觀じ、不虛作住持を觀じる、と、その次第を示す。これは、仏の功德は不虛作住持功德におさまり、その不虛作の願力によつて還相回向が行われる事を示すものである。

(iii) 往生人の四種の功德を説いて還相回向の活動を示す。

続いて、菩薩の四種の功德について示すのであるが、『淨土論』の「かの菩薩を觀するに、四種の正修行功德成就したまへることあり」という言葉を受けて、

真如はこれ諸法の正体なり。体、如にして行すればすなはちこれ不行なり。不行にして行するを如実修行と名づく。(『註釈版聖典』三二八頁)

と、真如がすべてのものの本当の姿である。真如(真実)にかなつて修行すれば、不行(とらわれを離れた修行)であり、不行として行するので、如実の修行と名づけると、菩薩の莊嚴功德の性質を明かしている。そして、それは本来、真如からの無限のはたらきであるが、次に四種の莊嚴功德として明かしていくのである。この菩薩四種莊嚴功德こそ、還相回向の大悲の活動を具体的に示されるものであり、不虛作の願力のはたらきを具体的に説くものであると言えよう。

(ア) (不動而至) 淨土を動かないで迷いの世界に至る

菩薩四種莊嚴功德の一つ目は、

一つには、一仏土において身、動揺せずして十方に遍す、種々に応化して実のごとく修行してつねに仏事をなす。

(『註釈版聖典』三二八頁)

とあるように、浄土を動かないで迷いの十方世界に至り、さまざまな姿を現し衆生を救済するのである。つまり、空間を超えて行動するのである。このように、浄土を動かずしてあらゆる所に至るので、「不動而至」と言う。

(イ)「一念遍至」一瞬の内にあらゆる所に至る

菩薩四種莊嚴功德の二つ目は、

二つには、かの応化身、一切のとき、前ならず後ならず、一心一念に大光明を放ちて、ことごとくよくあまねく十方世界に至りて、衆生を教化す。〔註釈版聖典〕三一九頁

とあるように、菩薩の化身は、あらゆる時において時間的前後がなく、しかも一瞬のうちに、大いなる光明を放ち、すべての世界に至り、人々を教化するのである。つまり、不動而至のはたらきに、時間的前後がない（時間を超えて行動する）ことを表している。このように、一瞬のうち（一念）にあらゆる所に（遍く）至るので、「一念遍至」と言う。

(ウ)「無相供養」形にとらわれず供養する

菩薩四種莊嚴功德の三つ目は、

三つには、かれ一切の世界において、余なくもろもろの仏会を照らす。大衆余なく、廣大無量にして、諸仏如来の功德を供養し、恭敬し、讃嘆す。（中略）諸仏の功德を供養し讃するに、分別の心あることなし〔註釈版聖典〕三二〇頁

とあるように、あらゆる世界において、余すところなく仏がたの説法の座や大衆を照らし、限りなく供養し敬い、

諸仏の功德を供養し、敬い、讃嘆する。その諸仏の功德を供養し讃嘆するのに、分別のとらわれの心はないというのである。つまり、形（相）など一切のとらわれを離れて諸仏を供養するので、これを「無相供養」と言う。

(エ) 「示法如仏」 仏のいない所で、仏のごとく仏法を示す

菩薩四種莊嚴功德の四つ目は、

かれ十方一切の世界に三宝ましまさぬところにおいて、仏法僧宝功德大海を住持し莊嚴して、あまねく示して如実の修行を解らしむ。(中略) 仏法を示して仏のごとくせん(『註釈版聖典』三三〇頁)

とあるように、十方世界の三宝のない所において、海のように大いなる三宝をたもち伝える為に、真実になつた修行を衆生にひろく示して教える。そして、仏のように仏法を説き示すというのである。つまり、仏のいない所で、仏の如く衆生に仏法を示すので、「示法如仏」と言う。

④ 『論註』 「浄入願心章」の引文

四番目の引文は、『論註』 「浄入願心章」の文である。「浄入願心」とは、浄土(清浄なる三嚴二十九種莊嚴)は阿弥陀如来の願心におさまる(帰入する)ということである。この引文は、(i) 願心莊嚴を明かす、(ii) 広略相入を明かす、(iii) 一法句を明かす、(iv) 器世間清浄・衆生世間清浄を明かす、の四段に分けられる。

(i) 願心莊嚴を明かす

まず、願心莊嚴を明かす一段では、

淨入願心とは、(また向に觀察莊嚴仏土功德成就と莊嚴仏功德成就と莊嚴菩薩功德成就とを説きつ。この三種の成就是願心の莊嚴したまへるなりと、知るべし)(浄土論)といへり。(『註釈版聖典』三二二頁)

とある。これによると、淨入願心というのは、『浄土論』に(さきに、阿弥陀仏の国土の功德成就と、阿弥陀仏の功德成就と菩薩の功德成就を説いた。この三種の成就是、阿弥陀仏の願心によるものである。知るべきである。)とあるように、三種莊嚴(三嚴二十九種莊嚴)の成就が、阿弥陀仏の四十八願等の清淨なる願心によるものであるということである。

(ii) 広略相入を明かす、

続いて、広略相入を明かす一段では、

上の国土の莊嚴十七句と、如来の莊嚴八句と、菩薩の莊嚴四句とを広とす。入一法句は略とす。(『註釈版聖典』三二二頁)

と、国土莊嚴十七種と仏莊嚴八種と菩薩莊嚴四種とを広とし、それが一法句に収まるのを略とと言う。一法句とは、唯一絶対の真如(真実)という意味である。つまり、三嚴二十九種莊嚴が、一法句たる真如に収まり、一法句たる真如は、三嚴二十九種莊嚴へと展開するのである。それを相入という言葉で表している。そして、

なんがゆゑぞ広略相入を示現するとならば、諸仏菩薩に二種の法身あり。一つには法性法身、二つには方便法身なり。法性法身によりて方便法身を生ず。方便法身によりて法性法身を出す。この二の法身は異にして分つべからず。一にして同じかるべからず。このゆゑに広略相入して、統ぬるに法の名をもつてす。菩薩、もし広略相入を知らざれば、すなはち自利利他するにあたはず。

と、どうして広と略が互いに収まるのかということを説明するのに、二種法身を挙げる。法性法身と方便法身がそれである。法性法身とは、色も形も無い真如法性そのものである仏身であり、方便法身とは、真如そのものである法性法身が、衆生救済の為に、名を示し形を現した仏身のことである。ともに、無限のはたらきを持っているので、法身という身として顕しているのである。この法性法身から方便法身を生じ、方便法身から法性法身を出す。この二つの法身は異なっているけれど、分けられるものではなく、一つではあるが、同じではないのである（不二不異）。また、「法性法身によりて方便法身を生じ」（由生）と言ひ、「方便法身によりて法性法身を出す」（由出）と表現しているところにも重要な意味がある。もともと無かつた方便法身が法性法身から生起するのであり、もともと有つた法性法身が方便法身によつて顕出されるのである。よつて、逆に方便法身から法性法身を生ずとは言えないのである。

なお、この二種法身は、浄土の莊嚴についての広略相入を説明する所に出てくる。それは、浄土と仏とは別々のものではないからであり、広略相入の根源にある動的なはたらきを、二種法身説によつて明らかにしているのである。そして、浄土が広略相入であることを知らねば、菩薩としての活動が出来ないと言ふ。（註3）

（iii）一法句を明かす

次に、一法句を明かす一段では、

（一法句とは、いはく清浄句なり。清浄句とは、いはく真実の智慧、無為法身なるがゆゑに）（浄土論）とのたまへり。
この三句は展転してあひ入る。（註釈版聖典】三三二頁）

と、一法句とは、清浄句であり、清浄句とは、真実智慧無為法身であると言ふ。先に、三嚴二十九種莊嚴が、一法

句におさまると言ったが、その一法句とは清浄句であり、それは真実なる智慧によつて確認された領域であり、真如そのもののなのである。それを真実智慧無為法身と言っている。この三句は同一の体をもったものであり、互いに収まるのである。

(iv) 器世間清浄・衆生世間清浄を明かす、

器世間清浄と衆生世間清浄を説く一段では、

〈この清浄に二種あり、知るべし〉といへり。(中略)〈なんらか二種、一つには器世間清浄、二つには衆生世間清浄なり。器世間清浄とは、向に説くがごときの十七種の莊嚴仏土功德成就、これを器世間清浄と名づく。衆生世間清浄とは、向に説くがごときの八種の莊嚴仏功德成就と、四種の莊嚴菩薩功德成就と、これを衆生世間清浄と名づく。かくのごときの一法句に二種の清浄の義を撰すと、知るべし〉(浄土論)とのたまへり。(『註釈

版聖典』三三三頁)

と、清浄句に二種あると言う。一つには器世間清浄、二つには衆生世間清浄である。器世間清浄とは、十七種の莊嚴仏土功德成就のことであり、衆生世間清浄とは、八種の莊嚴仏功德成就と四種の莊嚴菩薩功德成就のことである。「器」とは、「うつわ」のことで、仏土(浄土)のことを言い、それに対し「衆生」とは、その浄土に住むものことで、阿弥陀仏(仏)とそこに往生したもの(菩薩)を指す。「世間」とは、世の中の生きものを指す場合と、生きものが生きる世界を意味する場合がある。つまり、清浄句という一法句の中に、浄土と浄土に住む仏・菩薩が清浄であるという二種類が収まるのである。

⑤『論註』『善巧摂化章』の引文

五番目の引文は、「善巧摂化章」の文である。善巧摂化とは、菩薩の巧みな利他の救済活動のことである。

善巧摂化とは、（かくのごとき）の菩薩は、奢摩他・毘婆舍那、広略修行成就して柔軟心なり（浄土論）とのたまへり。

〔註釈版聖典〕三三五頁

とあるように、菩薩は、思いを止め静かな心で浄土の広略を観察する行を修め、一切のとらわれを離れた柔軟心を得ているのである。次に、

〈柔軟心〉とは、いはく広略の止観、相順して修行して、不二の心を成ぜるなり。たとへば水をもつて影を取るに、清と静とあひ資けて成就するがごとしとなり。

とあるように、柔軟心とは、広と略の止観（思いを止め観察する）がそれぞれ相応し修行して、観ずる心と観じられる実相とが区別できない一つのものとなったことをいうのである。それをたとえれば、水にものの姿を映すとき、水の清らかさと静かさとの両方がそろつて、初めて姿がうつるようなものである。そして、

〈かくのごとき巧方便回向を成就したまへり〉（浄土論）とのたまへり。〈かくのごとき〉といふは、前後の広略みな実相なるがこととなり。実相を知るをもつてのゆゑに、すなはち三界の衆生の虚妄の相を知るなり。衆生の虚妄を知れば、すなはち真実の慈悲を生ずるなり。真実の法身を知るは、すなはち真実の帰依を起すなり。慈悲と帰依と巧方便とは、下にあり。

とあるように、実相（真実のすがた・ここでは浄土の莊嚴）を知るがゆゑに、三界の衆生の虚妄の姿を知るので、これを救おうと真実の慈悲の心を生じる。真実の法身（実相）を知るといふことは、真実の帰依を起すことである。更に続けて巧方便回向について、

へなにものか菩薩の巧方便回向。菩薩の巧方便回向とは、いはく、礼拝等の五種の修行を説く、所集の一切の功德善根は、自身住持の樂を求めず。一切衆生の苦を抜かんと欲すがゆゑに、作願して一切衆生を摂取して、ともに同じくかの安樂仏国に生ぜしむ。これを菩薩の巧方便回向成就と名づく（浄土論）とのたまへり。

とある。これによると、巧方便回向とは、礼拝等の五種の修行（五念門）を修めることを説いたが、その行を修めて得られたすべての善根功德によつて、自分自身の為に変わる事のない安樂を求めるのではなく、その功德によつて、一切の衆生の苦しみを除こうと思ふことである。そこで、願をおこしてすべての衆生を摂め取り、ともに皆浄土に往生させるのである。

その後、『大経』三輩について説かれたところに、「行に優劣ありと言へども、みな無上菩提心（この上ないさを求める心）を起こすのである。」とあり、「無上菩提心は、すなはちこれ願作仏心（仏になろうと願う心）なり。願作仏心は、すなはちこれ度衆生心（衆生を救済しようという心）なり。」と云う。

そして、「回向」について、

おほよそ〈回向〉の名義を釈せば、いはく、おのれが所集の一切の功德をもつて、一切衆生に施与して、ともに仏道に向かへしめたまふなりと。

と、回向という言葉の意味を解釈すれば、自らが積み重ねた一切の功德を、一切の衆生に施して、ともにさとりに向かわせてくださるのであると言う。親鸞は、「向かへしめたまふなり（尊敬の表現）」と読み、その主語は、法蔵菩薩であると受け取っている。

さらに、「巧方便」について、

〈巧方便〉とは、いはく、菩薩願ずらく、（おのれが智慧の火をもつて一切衆生の煩惱の草木を焼かんと、もし一

衆生として成仏せざるにあらば、われ仏に成らじ」と。しかるに衆生いまだことごとく成仏せざるに、菩薩すでにみづから成仏せんは、たとへば火樵して、一切の草木を摘んで焼きて尽さしめんと欲するに、草木いまだ尽きざるに、火樵すでに尽きんがごとし。その身を後にして身を先にするをもつてのゆゑに、巧方便と名づく。とある。菩薩は、もし衆生が一人でも成仏しないようなことがあれば、私は仏にならないと願っていないが、衆生がすべて成仏したわけではないのに、菩薩が先に成仏している。そのことを、木の火箸で草木を摘んで焼き尽くそうとしたところ、草木がまだ焼けきらないうちに、木の火箸が先にやけてしまうようなものであるという譬えを使い、自分自身ことを後に願いながら、衆生を救う為に衆生よりも先に成仏してしまうから、「巧方便」というのであるとする。菩薩は、我が身の自利を後にして、衆生救済の利他行を先にするが、その利他行がそのまま自利の達成となり、衆生より先に成仏することになることを示すものである。

⑥『論註』『障菩提門（離菩提障）章』の引文

六番目の引文は、『論註』『障菩提門』の文である。ここは、菩提（さとり）への道を妨げる三種類の心から遠離するという。

まず、一つに、智慧門によつて、「我心貪着自身心（私の心が私自身に貪着する心）を離れることである。

一つには智慧門によりて、自棄を求めず、わが心自身に貪着するを遠離せるがゆゑに。（『註釈版聖典』三三七頁）とあるのがそれである。

二つに、慈悲門によつて、「無安衆生心（衆生を安らかにすることのない心）」を離れることである。

二つには慈悲門によれり。一切衆生の苦を抜いて、無安衆生心を遠離せるがゆゑに。

とあるのがそれである。

三つに、方便門によつて供養恭敬自身心（自分自身を供養し敬愛する心）を遠く離れることである。

三つには方便門によれり。一切衆生を憐愍したまふ心なり。自身を供養し恭敬する心を遠離せるがゆゑにとあるのがそれである。

⑦『論註』『順菩提門章』の引文

七番目の引文は、『論註』『順菩提門』の文である。ここは、障菩提の三種の心の反対のものであつて、菩提に隨順する無染清淨心・安清淨心・樂清淨心の三心を示している。

一つには、無染清淨心（煩惱の汚れない清淨な心）であり、自分自身のためにさまざまな樂を求めないことである。

一つには無染清淨心。自身のためにもろもろの樂を求めざるをもつてのゆゑに（淨土論）とのたまへり。（註

釈版聖典』三二八頁）

とあるのがそれである。

二つには、安清淨心（衆生を安らかにする清淨な心）であり、一切の衆生の苦を抜くことである。

二つには安清淨心。一切衆生の苦を抜くをもつてのゆゑに（淨土論）とのたまへり。

とあるのがそれである。

三つには、樂清淨心（衆生に樂しみを与える清淨な心）であり、すべての衆生に大いなるさとりを得させることである。また、衆生を攝取して阿弥陀仏の淨土に往生させることである。

三つには樂清淨心。一切衆生をして大菩提を得しむるをもつてのゆゑに、衆生を攝取してかの国土に生ぜしむ

るをもつてのゆゑに）（浄土論）とのたまへり。

とあるのがそれである。

⑧『論註』『名義撰対章』の引文

八番目の引文は、『論註』『名義撰対章』の引用である。「名義撰対」の「名」とは名称、「義」とは名によつてあらわされる意味、「撰対」とは、その名称がその意味によく摂まることを言う。つまり、障菩提門章に説いた智慧・慈悲・方便の名を、般若と方便の二義に摂め、また、遠離我心貪着自身心・遠離無安衆生心・遠離供養恭敬自身心の三種の遠離心の名を、無障心（遠離障菩提心）の一義に摂め、順菩提門章の無染清浄心と安清浄心と樂清浄心の三種の清浄心の名を妙樂勝真心の一義に摂めることを言う。

具体的に見ていくと、まず、智慧・慈悲・方便の名が、般若と方便の二義におさまるということを、

名義撰対とは、（向に智慧・慈悲・方便の三種の門は般若を撰取す。般若方便を撰取すと説きつ、知るべし）（浄土論）とのたまへり。（『註釈版聖典』三二九頁）

と言われている。般若とは梵語プラジュニヤーの音写で、真実の智慧のことであるが、「般若」とは如に達するの慧の名なり。」とあるように、真如実相（如）の真実に達する智慧のことである。方便とは、「方便」とは権に通ずるの智の称なり。」とあるが、権とは仮ということで、ここでは本質に対する現象といつてよいであろう。つまり、方便とは、現象を知る智のことである。般若がものの本質が一如平等なることを知る智慧（慧）であるのに対し、方便は、その一如平等なるものが、具体的な現象として現れた差別の相を知る智慧（智）である。般若と方便とは互いに縁となつて動であり、互いに縁となつて静である。動でありながら静を失わないのは、般若の徳である、静でありな

がら動を失わないのは方便の力である。般若は寂滅の靜であり、方便は一切の衆生に応じてはたらく動なのである。そのことを、

しかればすなはち智慧と方便と、あひ縁じて動じ、あひ縁じて靜なり。動、靜を失せざることは、智慧の功なり。靜、動を廃せざることは方便の力なり。

と言う。

また、遠離我心貪着自身心・遠離無安衆生心・遠離供養恭敬自身心の三種の遠離心の名を、無障心（遠離障菩提心）の一義に摂めることを、

〈向に遠離我心貪着自身・遠離無安衆生心・遠離供養恭敬自身心を説きつ。この三種の法は、障菩提心を遠離するなりと、知るべし〉（浄土論）とのたまへり。

と言われている。（願事成就章において、遠離障菩提心のことを、無障心としている。）

さらに、順菩提門章の無染清浄心と安清浄心と樂清浄心の三種の清浄心の名を妙樂勝真心の一義に摂めることを〈向に無染清浄心・安清浄心・樂清浄心を説きつ。この三種の心は略して一处にして、妙樂勝真心を成就したまへりと、知るべし〉（浄土論）とのたまへり。

と言われている。そして、妙樂勝真心の樂について、

樂に三種あり。一つには外樂、いはく五識所生の樂なり。二つには内樂、いはく初禪・二禪・三禪の意識所生の樂なり。三つには法樂樂、いはく智慧所生の樂なり。この智慧所生の樂は、仏の功德を愛するより起れり。

とある。これによると、樂に三種ある。一つは外樂であり、五識（眼・耳・鼻・舌・身の五根によって生じる認識）による楽しみである。二つは内樂であり、禪定の意識による楽しみである。三つは法樂樂であり、さとり智慧に

よる樂である。それは、仏のさとり功德を愛樂することから起るものなのである。そして、

これは遠離我心と遠離無安衆生心と遠離自供養心と、この三種の心、清淨に増進して、略して妙樂勝真心とす。妙の言はそれ好なり。この樂は仏を縁じて生ずるをもつてのゆゑに。勝の言は三界のうちの樂に勝出せり。真の言は虚偽ならず、顛倒せざるなり。

とあるように、それは、先に挙げた三種の遠離心が進展して一つの妙樂勝真心となるのである。妙とは好いという意味であり、樂は阿弥陀仏を縁として起るからであり、勝とは、迷いの世界の楽しみに超え勝れているということであり、真とは、偽りでなく真実になつてゐることをいうのである。

⑨『論註』『願事成就章』の引文

九番目の引文は、『論註』『願事成就章』の文である。願事成就とは、『論註』の当分では、淨土往生の願事が成就したことを言うのであるが、親鸞は、還相の菩薩の衆生救済の願事の成就を明かすものであり、その根源に法藏菩薩の願事の成就があるとする。註4

願事成就とは、〈かくのごとき菩薩は智慧心・方便心・無障心・勝真心をもつて、よく清淨仏国土に生ぜしめたまへりと、知るべし〉（淨土論）とのたまへり。〈知るべし〉とは、いはく、この四種の清淨の功德、よくかの清淨仏国土に生ずることを得しむ。これ他縁をして生ずるにはあらずと知るべしとなり。（『註釈版聖典』三三一頁）とあるように、菩薩は、智慧心・方便心・無障心・勝真心の四種の心によつて、衆生を淨土に往生させるのであつて、この四種の心の清淨な功德以外を縁として、往生するのではないということ、知るべきであるというのである。

そして、これを菩薩が五念門にかなつて、自由自在に利他の行いができるようになるというのである。

〈これを菩薩摩訶薩、五種の法門に随順して、所作意に随ひて自在に成就したまへりと名づく。向の所説のごとき身業・口業・意業・智業・方便智業、法門に随順せるがゆゑに〉（浄土論）とのたまへり。
とあるのがそれである。

⑩『論註』『利行満足章』の引文

十番目の引文は、『論註』『利行満足章』の文である。利行満足とは、自利利他の二利の行が満足（成就）する、つまり菩薩行の完成ということである。

利行満足とは、〈また五種の門ありて、漸次に五種の功德を成就したまへりと、知るべし。なにものか五門。一つには近門、二つには大会衆門、三つには宅門、四つには屋門、五つには園林遊戯地門なり〉（浄土論）とのたまへり。この五種は、入出の次第の相を示現せしむ。入相のなかに、初めに浄土に至るは、これ近相なり。いはく大乘正定聚に入るは、阿耨多羅三藐三菩提に近づくなり。浄土に入りをはるは、すなはち如来の大会衆の数に入るなり。衆の数に入りをはりぬれば、まさに修行安心の宅に至るべし。宅に入りをはれば、まさに修行所居の屋宇に至るべし。修行成就しをはりぬれば、まさに教化地に至るべし。教化地はすなはちこれ菩薩の自娛樂の地なり。このゆゑに出門を園林遊戯地門と称すと。（『註釈版聖典』三三三頁）

とあるが、これによると、五種の門があつて、五種の功德を成就することを知るべきであるといい、五種の門とは、一つには近門、二つには大会衆門、三つには宅門、四つには屋門、五つには園林遊戯地門であると『浄土論』に述べられているとする。この五種の門は、浄土に入つてさとりを開くという自利の人の相と、浄土から出て衆生をさとりに導くという利他の出の相とを、順次説き示したものである。浄土に入る入相の中、浄土に往生することを近門

という。浄土に往生した後、阿弥陀仏の教えを聞くことのできる大会衆（聖者）の中に入ることを大会衆門という。大会衆の中に入れば、安心して修行できる住まいに入る。それを宅門という。次に、その屋内で修行を積むに至る。それを屋門という。そこで修行が成就すれば、思いのままに衆生を教化する教化地の位に至る。これは、浄土から出て衆生を教化する出の相であり、園林遊戯地門という。菩薩は衆生の教化を自らの楽しみとするので、教化地のことを「菩薩の自娯樂の地」といつているところにも注目すべきであらう。

また、還相回向釈の第一番目の引文は、『浄土論』『利行満足章』五功德門の園林遊戯地門の釈の引用であつたが、それを註釈する『論註』の部分も引用されている。そこには、

〔出第五門とは、大慈悲をもつて一切苦悩の衆生を觀察して、応化身を示して、生死の園、煩惱の林のなかに回入して、神通に遊戯し、教化地に至る。本願力の回向をもつてのゆゑに。これを出第五門と名づく〕（浄土論）とのたまへり。〔応化身を示す〕といふは、『法華経』の普門示現の類のごときなり。〔遊戯〕に二つの義あり。一つには自在の義。菩薩衆生を度す。たとへば獅子の鹿を搏つに、所為はばからざるがごときは、遊戯するがごとし。二つには度無所度の義なり。菩薩衆生を觀するに、畢竟じてあらゆるごときなし。無量の衆生を度すといへども、実は一衆生として滅度を得るものなし。衆生を度すと示すこと遊戯するがごとし。〔本願力〕といふは、大菩薩、法身のなかにおいて、つねに三昧にましまして、種々の身、種々の神通、種々の説法を現ずることを示すこと、みな本願力より起るをもつてなり。たとへば阿修羅の琴の鼓するものなしといへども、しかも音曲自然なるがごとし。これを教化地の第五の功德の相と名づくとのたまへり〕と。以上抄出（『註釈版聖典』

三三四頁）（傍線、著者挿入）

とある。この中で、特に注目すべき所が二つある。一つは、「遊戯に二つの義があり、一つは自在の義。二つは度無

所度の義なり。」とある二つ目の義である。度無所度とは、衆生を済度しても済度しているというとらわれの思いがないこという。もう一つは、「みな本願力より起るをもつてなり」という言葉である。親鸞は、大菩薩（『論註』の当分は、八地以上の菩薩であるが、親鸞にとつては還相の菩薩）が、平等法身のさとりの中において、さまざまな姿を現し、さまざまな説法をするのは、みな阿弥陀仏の本願力によるものであることである。

以上、『浄土論』一文・『論註』九文、合わせて十文が引用されていたわけであるが、親鸞においては、すべて還相の菩薩について明かしたものである。

最後の『論註』『利行満足章』の引文についても、『論註』当分では、浄土を願生する行者が、この世において礼拝・讃嘆・作願・觀察・回向の五念門の修行を行なったことに対して、浄土において近門・大会衆門・宅門・屋門・園林遊戯地門の五功德門が成就し、仏のさとりに至るということを表している。そして、前四門を自利（入）とし、第五門の園林遊戯地門を利他（出）とするのである。しかし、親鸞においては、園林遊戯地門のみならず、五功德門すべてを還相回向釈に引用されているということは、五功德門すべてを成仏以後の還相の有様として見られているということなのである。つまり、從因至果の五功德門ではなく、すでに成仏したものが、果から因へ降りてきてその仏徳を示現していくという、從果降因の相とみなされていたのである。

そして、還相のすべてが、阿弥陀仏の本願力に基づいているわけであるが、そのことが、五功德門の成就の文について、その送り仮名が、使役の意味になっていることより窺える。^(註5)

2. 往還結釈

最後に、

しかれば大聖（釈尊）の真言、まことに知んぬ、大涅槃を証することは願力の回向によりてなり。還相の利益は利他の正意を顕すなり。（『註釈版聖典』三三五頁）

と、「証卷」を結んでいる。この文章は、「証卷」の結論であり、往相回向と還相回向を総括されたものである。大涅槃を証することが本願力の回向によるということは、同時に還相のはたらきも本願力の回向によることを表す。なぜなら、大涅槃（大乘の涅槃）は、自利のみで完成するものではなく、利他によつて完成するものであり、往相は必然的に還相へと展開するからである。

また、「利他の正意」の「利他」とは、阿弥陀仏の利他（本願力）であると同時に、往生者の利他である。つまり、穢土に還つて衆生を救済するという事が、阿弥陀仏の本意であると同時に、阿弥陀仏に救われた往生者の本意でもあるのである。そして、

ここをもつて論主（天親）は広大無碍の一心を宣布して、あまねく雑染堪忍の群萌を開化す。宗師（曇鸞）は大悲往還の回向を顯示して、ねんごろに他利利他の深義を弘宣したまへり。仰いで奉持すべし、ことに頂戴すべしと。

と、天親は、広大無碍の一心を宣布して、煩惱に汚された娑婆の衆生を導いてくださり、曇鸞は、往相も還相もとにも阿弥陀仏の大いなる慈悲による回向であることを顕して、「他利利他の深義」^{（注）}を説き広めてくださつたと二人をほめたたえ、その教えを仰ぎ、謹んでいただくべきであると、「証卷」を結んでいる。

おわりに

以上、還相回向釈を通して還相の悲用について考察したわけであるが、それは、真実の証の内容に他ならない。親鸞は、阿弥陀仏より回向された真実の行信によって、現生では正定聚の位につき、当来には浄土に往生すると同時に、必ず滅度に至るということを明らかにされた。その滅度とは、無上涅槃・大涅槃のことであつて、自らのさとの完成で終わるのではなく、他を救済することによって完成する自利利他円満の世界、無住処涅槃のことである。ここに、「証卷」において、往相の証果を明かす一段のあとに、還相の悲用が説かれる必然的理由がある。しかも、『浄土論』『論註』を長々と引用される還相回向釈は、「証卷」の約四分の三を占めていることを考えれば、往相の証果が還相の悲用へと展開すると言ふより、往相の証果の内容そのものが還相の悲用だと言つた方がよいであらう。

註

(註1) 「利他」の言は、往生人の果(自利)後の利他化他を意味すること、を以てその当分とするが、その本源が勿論、如来の妙願力にあるが故をもつて帰本すれば亦、本願力・他力、の「利他」であるべきは、理の必然である。(加藤弘眼『教行信証堅徹』

二二二頁)

(註2) 読み方は、梯實圓『教行信証の宗教構造』三八四―三八七頁参照

(註3) 願心莊嚴と広略相入と二種法身の不二不異との三つの関係を明らかにしておくことが大切であり、その為には、原因と根拠をはっきり区別する必要がある。星野元豊氏は、「願心は三種莊嚴の形成の原因である。莊嚴は願心を原因として、その結果として形成されたものである。それに対して一如の構造は三種莊嚴の成立の根拠である。すなわち二種法身の不二不異の構

造において広略相入が成立し、これらの構造を根拠としてその上に願心莊嚴が成立するのである。ここでは、一如の構造は三種莊嚴の根拠であり、三種莊嚴は結果である。従って、願心と三種莊嚴は原因と結果の関係であり、一如と三種莊嚴は成立の関係として、根拠と結果の関係である。」と言う。(星野元豊『講解 教行信証』二二四二頁～二二四七参照)

(註4)『入出二門偈』に「無礙光仏、因地の時、この弘誓を発し、この願を建てたまふ。菩薩すでに智慧心を成じ、方便心・無障心を成じ、妙樂勝真心を成就して、すみやかに無上道を成就することを得たまへるなり。」(註釈版聖典「五四八頁」とあるように、聖人は、法蔵菩薩の願事であるとしている。

(註5)「入第一門といふは、阿弥陀仏を禮拜してかの国に生ぜしめんがためにするをもつてのゆゑに、安樂世界に生ずることを得しむ。これを第一門と名づく」とのたまへり。仏を礼して仏国に生ぜんと願するは、これ初めの功德の相なりと。(入第二門とは、阿弥陀仏を讃嘆し、名義に随順して如来の名を称せしめ、如来の光明智相によりて修行せるをもつてのゆゑに、大会衆の数に入ることを得しむ。これを入第二門と名づく)(浄土論)とのたまへり。如来の名義によりて讃嘆する、これ第二の功德の相なりと。(傍線、著者挿入)(註釈版聖典「三三三頁」など、使役の意の送り仮名を送り、還相のすべてが、阿弥陀仏の本願力によることを表している。

(註6)「他利利他の深義」とは、『論註』に「他利と利他と、談ずるに左右あり。もし仏よりしていれば、よろしく利他といふべし。衆生よりしていれば、よろしく他利といふべし。いままさに仏力を談ぜんとす、このゆゑに利他をもつてこれをいふ。まさに知るべし、この意なり。」(註釈版聖典「一九二頁」とあるのがそれである。これによると、他利と利他には、何を語ろうとするかによって違いがある。仏から言えば、(仏が)他(衆生)を利益するから利他といふべきである。衆生から言えば、他(仏)が(衆生を)利益するから他利といふべきである。今は仏のはたらきを語ろうとするのであるから利他といふのである。この意味をよく知るがよい、という。

*本文の現代語訳に関しては、主に、『浄土真宗聖典 顕浄土真実教行証文類（現代語版）』に依った。

〈キーワード〉

教行信証・証卷・還相回向